

Title	脳血管撮影の眼科領域への応用(Abstract_要旨)
Author(s)	錦織, 劭
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1965-06-22
URL	http://hdl.handle.net/2433/211559
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏 名	錦 織 劭 にし ごり つとむ
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 199 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 6 月 22 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	脳血管撮影の眼科領域への応用

論文調査委員 (主 査) 教授 浅山 亮二 教授 荒木 千里 教授 半田 肇

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、近年、脳神経外科領域に於いて発達・普及して来た脳血管撮影法を、眼科領域へ導入し、眼科臨床の上での有効性と限界を追究する事である。脳神経12対の内、6対が分布している眼は、神経学の大きな焦点であり、これの神経学、即ち神経眼科学は古くより眼科の確固たる一部門であった。然しながら、現在の段階に於ける神経眼科学は、ただ検眼鏡の所見と臨床神経学的所見とを拠り所としているに過ぎない。脳血管撮影の近年の進歩・普及により、脳血管障害、脳腫瘍等の臨床が飛躍的前進をとげつつある現今、本法を神経眼科領域へ応用し、早期より疾患の性質を鑑別し、治療方針の早期決定に資する事は、極めて有意義である。

対象としては、200例の症例に約300回の脳血管撮影を実施し、これを3つの疾患群に大別して、その結果を検討した。

1. 脳血管障害の編に於ては、特に内頸動脈瘤と頸動脈—海綿洞瘻の症例が多かった。床上突起上内頸動脈瘤の眼所見としては、突発する高度の動眼神経麻痺に、散瞳を必発的に伴うのが特徴的である。頸動脈—海綿洞瘻は従来より搏動性眼球突出症として認識されていたが、動静脈間短絡路の発達の個人差の大きい本疾患に於いては、眼球の突出・搏動等がなくても、海綿洞内病変を疑わせる所見があれば、進んで脳血管撮影を行なって、診断を確定すべき事を、症例を以って強調した。

脳血管障害による視野欠損——例えば同名半盲等——の診断・原因探究に於いては、本法の価値は極めて限定され、症例の大部分に、直接、視野欠損の原因を説明し得るに足る血管の異常所見を見出さなかった。かかる場合では、血管撮影で描出されない様な細小血管の病変によるためと考えられる。

2. 脳腫瘍の編。周知の如く、鬱血乳頭の有無は、脳腫瘍の診断に大きな意義を有している。然しながら、鬱血乳頭の初期は、視束炎で視機能の比較的良好なものや、Pseudoneuritis と鑑別困難な場合が少なからずあり、特に偶々、種々の神経学的症状が共存する場合には、決定が益々困難となって来る。この鑑別のため、マリオット盲点の早期拡大や、網膜血管圧の測定等がとりあげられて来たが、脳血管撮影法

は積極的に頭蓋内の Space-occupying lesion の有無を検索して、視束乳頭所見の解釈に資する所が大きい事を、症例を以て示し、かかる鑑別法の有効性を強調した。

又、炎性視束萎縮や、Foster Kennedy 症候群の症例に於いても、本法により、早期から腫瘍の有無を検索し、腫瘍は脳外科的処置により、視束炎或いは視交叉部蜘蛛膜炎は薬物療法、或いは視交叉部蜘蛛膜炎の癒着の除去等を行なう事により、初期より治療方針を確定し、早期治療へ導き得る事を示した。

3. 視交叉部腫瘍の編に於いては、脳血管像の態度を検討する事により、早期より腫瘍を鑑別し得る事、特に他の諸検査成績や眼症状に先行して、脳血管撮影法が真先に唯一の診断的所見を呈示する場合がある事、或いは術後経過追究の上に於いても、更に又、蜘蛛膜炎を伴なって球後視束炎様の病像を呈する複雑な症例に於いても、本法の診断的価値が大きい事を、多数の症例を以て示した。

尚、下垂体腫瘍例にみられた主な血管写所見は、A₁ の挙上、Taschenbildung、C₁、C₂ の側方偏位、内頸動脈サイフォン部の Opening out であり、18例中、夫々、14、14、8、7例にみられた。

以上より明らかな如く、本研究は、神経眼科領域に脳血管撮影法を導入する事によって、この領域に新たな診断的手段の有効な事を示し、神経眼科学の前進に、一つの有益な方向を提示した事にその意義がある。

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、脳血管撮影法を眼科領域へ導入し、眼科臨床のうえでの有意義性と限界を追究するにある。対象として200例の症例に約300回の脳血管撮影を実施し、これを3つの疾患群に大別し、その結果を検討した。脳血管障害部門においては、内頸動脈瘤と頸動脈一海綿洞瘻の症例が多く、これらの眼所見と血管写所見について論及し、また、脳血管障害による視野欠損—たとえば同名半盲など—の診断、原因探索における本法の有意義性についてのべた。脳腫瘍部門においては初期のうっ血乳頭か否か、判定困難な場合に、本法により頭蓋内の Space-occupying lesion の有無を検索して、重要なてがかりとなしうることを強調した。視交叉部腫瘍部門においては、脳血管像の態度を検討することにより、早期より腫瘍の有無を鑑別し、治療指針の早期決定に資することができることをのべた。かくして、本研究は、神経眼科領域へ脳血管撮影法を導入することによって、この領域に新たな診断手段の有意義であることを示し、神経眼科学の前進に、一つの有益な方向を提示した。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。